

一九七九年の夏、ニューファンドランドに私が滞在中、島のテレビにあまり親しめなかったことを、前にこの欄で書いたが、カナダの元首相ジョン・G・ディーン・フェンベーカー氏（以下敬称略）が死去した際の一連の報道と追悼のテレビ番組だけは例外で、私はふしぎに心打たれ、長時間テレビの前に釘付けになっていたことを覚えている。

私はカナダの政治（家）に、もともとそれほど関心をもっているわけではない。時折の政権交代劇に対しても、私は遠く外野席から観戦しているくらいの気持ちしかもてない。それなのに、このディーン・フェンベーカーという一政治家の死去の報道に、どうしてこう心動かされ、哀惜の情を禁じえなかったのだろうか、自分でもよく説明できないのである。一度、私はオタワの街頭で、当時野党党首だった氏の姿を見かけたことがあるだけで、もちろんなんの面識もない。しかし、どういうわけか、カナダの政治家の中で、ディーン・フェンベーカーは私にとっていちばん印象が深いのである。

氏は政治家として必ずしも不遇だったとはいえないかもしれない。一九五七年に二十二年ぶりにカナダに保守党政権をもたらし、六三年の選挙に敗れるまで数年間首相の座を占め、その後は野党党首あるいは政界長老として重んじられ、死去に際しては国を挙げての哀悼を受けたのだから、カナダの政治家としては、功成り名遂げた一人だったといっても過言ではあるまい。

しかし、この政治家には、なにか挫折と敗北のにおい、ドン・キホーテ的な悲壮感と時代遅れの滑稽感といったようなものが、終始つきまとっていたように思われる。ディーン・フェンベーカーという政治家がとりわけ私に印象が強いのは、私が一九六〇年代の始めにカナダへ留学した時期が、ちょうど、ディーン・フェンベーカー政権の末期にぶつかっていたからかもしれない。カナダへ渡る前からカナダの首相の名前くらいは知っていたが、トロントに到着した留学生の私を驚かせたのは、この首相のすさまじいほどの悪評

消え去った夢

——政治家の死をめぐる——

ぶりだった。新聞の論調は批判的というより攻撃的だったし、漫画や小説などすべてディーン・フェンベーカーを標的にしている感じだった。当時、下落しつつあったカナダ・ドルまでが、「ディーン・フェンベーカー」とあだ名をつけられる始末。自国の首相を軽蔑し嘲笑するのがあたかもインテリの標識であるかのごとき雰囲気は大学などにあつた。あごを左右にふるわせ、「わが同胞カナダ人諸君」と呼びかけるあの独特の仕草も、ものまねや嘲弄の対象になり、さながら国を挙げてこの首相を政権の座から引きずりおろすのに躍気になっているかのごとき空気に、私

は少なからず驚き、面食らったものだった。その後もディーン・フェンベーカーの人氣は下降の一路を辿り、とうとう六三年選挙の大敗となり、ディーン・フェンベーカー時代は終止符を打たれることになった。しかし、これだけの悪罵と嘲弄の中でついでに去った政治家が、いざ亡くなってみると、予想外に国民の敬愛を受けていたことが判明するのである（首相時代はるかに尊敬されていたはずのピアソン氏の死は、これほど悼まれなかったように思われる）。この間の事情は、必ずしも説明しやすくはない。

平野敬一

一九五八年の記録的な圧勝があつたにもかかわらず、成立したディーン・フェンベーカー政権は、悲劇的といえるほど惨たんなる行程を辿った。悲劇は、どこにあつたのか。一つは、ディーン・フェンベーカーがかかっているナショナルイズムの旗幟が、もはや時代の流れに合わなくなっていたこと。さらに氏がそれに呼びかけ、自分の支持層とみなしていた一般大衆が有効な政治勢力として、もはや機能しえなくなっていたこと、などが考えられる。ディーン・フェンベーカーは、すぐれた大衆政治家（ポピュリスト）であり、ナショナルリストであつたが、大衆政治もナショナル

ナリズムも、すでに時代の趨勢ではなかつた、ということになるか。いや、時代の趨勢といつても、それは要するにアメリカ（の資本と企業）との一体化を求めるとロント財界（つまり東部エスタブリッシュメント）のお気に召さなかつたというだけのことさ、としたり顔に私に解説してくれた知人もいた。あるいは、そういうことだったのかもしれない。

とにかくディーン・フェンベーカーは政治家として敗れ去つた。しかし氏の敗北は、たんなる一政治家の敗北ではなく、カナダ・ナショナルイズムの敗北であり、「ネーション」としての「カナダ」の消滅（即ち「アメリカ帝国」への同化）を意味するものだったと指摘し哀悼をささげるのは、他ならぬカナダの（おそらく唯一の）哲学者ジョージ・グラントである。ディーン・フェンベーカーの死が、予想外に人々に悼まれたのは、氏と共にと大きなもの（カナダの夢？）が消え去つたことを、カナダの民衆がこの哲学者とは別の次元で、本能的に感じとっていたからかもしれない。

去る十二月に東京で開かれた日本カナダ学会の年次大会ではカナダのナショナルイズムが統一テーマになっていたが、ディーン・フェンベーカーが象徴し、彼と共に消え去つたナショナルイズム（の夢）は、ついに表立った議題とはならなかつた。大会が終つた今ごろになって、私は、しきりにそのことが残念に思われるのである。

（東京大学教授）